

知覚的特性と美的特性との関係に関する一考察

松崎 俊之

An Inquiry into the Relation between Perceptual Properties and Aesthetic Properties

Toshiyuki MATSUZAKI

Aber Ledendige machen alle den Fehler, dass sie zu stark unterscheiden.
(Reiner Maria Rilke, *Duinese Elegien* 1)

0 はじめに

0.1 問題設定と本論考の狙い

私は、美的特性一般を、物理的特性という非美的特性を基盤としてそこから直接的に創発する「一次的美的特性 (the first-order aesthetic properties)」と、一次的美的特性を基盤として成立する「高階美的特性 (the higher-order aesthetic properties)」とに大きく二分して捉える美的特性に関する階層構造理論を提唱する者であるが、この階層構造理論において、一次的美的特性に関してとくに問題となる論点に、一次的美的特性と物理的特性との関係とならんで、一次的美的特性と知覚的特性との関係がある。階層構造理論の基本構想に関しては、先に拙論「美的特性に関する階層構造理論」(松崎[2010])においてその一端を披歴する機会を得たのだが、そこでは一次的美的特性と知覚的特性との関係について「一次的美的特性は知覚的特性 (perceptual properties) と不可分の一如体としてある」(松崎[2010]:24) という暫定的な理解を示すにとどまった。

本論考の第一の狙いは、この一次的美的特性と知覚的特性との関係についてさらに一步踏み込んだかたちでこれを主題的に取り上げ、廣松渉の表情理論をひとつの手掛かりとして、知覚的特性と美的特性との関係をあらたに捉え返す試みを示すことにある。

0.2 知覚的特性と一次的美的特性に関する暫定的 (導入的) 理解

それでは、知覚的特性と一次的美的特性とはそもそもいかなるものなのだろうか。あらためて言

うまでもなく、まず最初に押さえておかなければならないのは、これら二つの特性に関する基本理解なのであるが、ここでは色彩を例に取り上げ、その知覚的特性と一次美的特性がそれぞれいかなるものであるかを明らかにすることで、両特性に関する暫定的 (導入的) 理解を示すことにしよう。

たとえば、いま仮に RGB 値としてそれぞれ「0/0/100」、「240/0/0」、「255/255/0」という値をもつ三つの色彩 A (0/0/100)、B (240/0/0)、C (255/255/0) を取り上げ⁽¹⁾、その知覚的特性と一次的美的特性 (およびそれを言い表わす形容語) に当たるものを挙げてみるとするならば、それは以下のようなものとなろう。

(1) 知覚的特性

A : ある特定の青という性質 = ある特定の「青さ」(0/0/100)

B : ある特定の赤という性質 = ある特定の「赤さ」(240/0/0)

C : ある特定の黄という性質 = ある特定の「黄色さ」(255/255/0)

(2) 一次的美的特性とそれを言い表わす形容語 (epithet)

A : 沈潜性という性質 (「沈んだ」)、凝固性という性質 (「こわばった」)、冷たさという性質 (「冷たい」)、重々しさという性質 (「重々しい」)、硬さという性質 (「硬い」)、静寂さという性質 (「静寂な」)、沈着冷静さという性質 (「落ち着いた」)、陰鬱さという性質 (「陰鬱な」)、暗さという性質 (「暗い」) etc.

B : 情熱性という性質 (「情熱的な」)、華やかさという性質 (「華やかな」)、暖かさ (熱さ) とい

う性質（「暖かい（熱い）」）、激しさという性質（「激しい」）、強烈さという性質（「強烈な」）、明るさという性質（「明るい」）etc.

C：派手さという性質（「派手な」）、広がりという性質（「のびやかな」）、軽やかさという性質（「軽ろやかな」）、柔軟性という性質（「柔らかな」）、軽薄さという性質（「軽薄な」）、陽気さという性質（「楽しい」、「陽気な」）、明るさという性質（「明るい」）etc.

さて、上にその一端を示した色彩のもつ一次的美的特性に関して、とくに銘記しておく必要があるのは、以下の三点である。

(1)美的特性は、それが質的規定性であるかぎりにおいて、必然的に対他反照規定的な性格（すなわち、他との比較においてはじめてそれがそれとして規定されるという性格）を帯びることになる。たとえば、Aの色彩のもつ「重々しさ」はあくまでCの色彩のもつ「軽やかさ」との対比においてそれとして規定され、またBの色彩のもつ「暖かさ（熱さ）」はあくまでAの色彩のもつ「冷たさ」との対比においてそれとして規定されるのであり、さらにはCの色彩のもつ「のどかさ」はあくまでBの色彩のもつ「激しさ」との対比においてそれとして規定されるのである。仮に美的特性が対象に内具する即自的特性であると見なされるとするならば、それは一種の物象化の機制によるものと考えられる（cf. 廣松[1989]:75）。

(2)上に挙げた種々の形容語はたんに字義的な意味においてだけではなく、メタファー的（すなわち転義的・比喩的）な意味でも用いられる。美的特性にあってはとくに後者のメタファー的使用法が重要となる（たとえば「明るい」、「暗い」という形容語がメタファー的拡張を被ることによってそれぞれ「陽気な」、「陰気な」という形容語が指し示すところのものを含意することになる）。

(3)それぞれの色彩のもつ一次的美的特性として挙げられたものの多くは、色彩がもたらす心理的効果としてしばしば色彩心理学で取り上げられる以下のような感覚特性に直接関わるものと言える⁽²⁾。

- ①前後感（進出色－後退色）
- ②広狭感（膨張色－収縮色）

- ③寒暖感（暖色－寒色）
- ④軽重感（重感色－軽感色）
- ⑤硬軟感（硬い色－柔らかな色）
- ⑥心的昂低感（興奮色－沈静色）

1 知覚的特性と美的特性とを別個の特性と見なす立場

それでは、この知覚的特性と美的特性との関係はこれまでどのように捉えられてきたのだろうか。両特性の関係に関する理解を、20世紀後半から今日にいたる英米系の美学、いわゆる分析美学の潮流のうちに探してみるならば、分析美学の伝統においては、知覚的特性と美的特性との関係について、両者を別個の特性と見なす立場がその主流をなしていると言える。

以下では、こうした立場を採る多くの論者のなかからその代表者としてとくに三名を選び、彼らの議論を個々に見ておくことにしたい⁽³⁾。

1.1 モンロー・C・ビアズリー

最初に取り上げるのは、モンロー・C・ビアズリーの1973年の論考「美的性質とは何か」である。彼の論考中ここでの論脈においてとくに注目したいのは、つぎの一文である。

しかしながら、複合的な色彩デザイン（a complex color design）はもちろん快活なもの（cheerful）となりうるが、個々の同質的な色斑（a particular homogeneous color patch）は、それ自体として見るならば、真に快活なものたりうるとは私には思えない。

（Beardsley [1973/1982]:94）

この一文においてビアズリーは、「快活さ」のような美的特性をもちうるのは構造化された全体としての「複合的な色彩デザイン」（すなわちビアズリーの言う「領帶的性質（regional quality）」を具えたもの）のみであって、その全体を構成する要素である「個々の同質的な色斑」（すなわちビアズリーの言う「局所的性質（local quality）」しか具えないもの）は美的特性をもちえないと主張する。

この彼の主張を別の角度から捉えるならば、わ

れわれの言う一次的美的特性は本来美的特性ではなく、真に美的特性たりうるものはあくまで高階美的特性（より厳密に言うならば、構造的な高階美的特性⁽⁴⁾）のみであるということになる。

「個々の同質的な色斑」が知覚的特性（すなわち赤や青といった色彩特性）を帯びるものであることはあらためて言うまでもなからうが、だとすれば、同じものが一方で知覚的特性をもちながらも他方で美的特性はもたないと見なす以上、ピアズリーの理解では知覚的特性と美的特性は本来別個のものであるということになる。

1.2 フィリップ・ペティット

つぎに取り上げるのはフィリップ・ペティットの1983年の論考「美的実在論の可能性」である。ペティットはその冒頭でつぎのように述べる。

最初のコメントは、絵画の美的特徴づけ (aesthetic characterisations) は絵画的特徴づけ (pictorial ones [=characterisations]) とは別のものであるということである。絵画的特徴づけとは、絵画のうちに示される色彩の記述 (descriptions of the colours) を意味する。

(Pettit [1983]:17)

この一節でペティットは、絵画のもつ色彩という視覚的特性の記述を意味する「絵画的特徴づけ」⁽⁵⁾ と絵画のもつ美的特性の記述を意味する「美的特徴づけ」とは別個のものであると述べるのであるが、絵画に関する「絵画的特徴づけ」と「美的特徴づけ」が別個のものであるとするならば、それぞれの対象である視覚的特性と美的特性は別個のものであるということになる。あらためて言うまでもなく、視覚的特性は知覚的特性の一種と見なされることから、これを一般化するならば、この一節は、知覚的特性と美的特性が別個のものであるということを含意するものと解される。すなわちペティットが「絵画的特徴づけ」と「美的特徴づけ」は別個のものであると主張するにあたって、その暗黙の前提となっているのは、知覚的特性と美的特性とを別個のものと捉える彼の理解であると言えるのである。

ペティットは、知覚的特性と美的特性とを別個

のものと捉えたうえで、両者の関係についてつぎのように述べる。

もし美的特徴づけが非絵画的 (non-pictorial) であり、それらが絵画的特徴の点で判別不能 (indistinguishable) 二つの作品に適用されとするならば、このことは、美的特徴づけは絵画的特徴づけにスーパーヴィーンする (supervenient) ということの意味する。その絵画的特徴づけの点で二つの作品が判別不可能であるということ、それらが美的に判別不可能であるということを含意する (entail)。同じ意味で (equivalently)、二つの作品の間に絵画的差異がないとしたならば、両者の間には美的差異もありえないということになる。

(Pettit [1983]:18)

先と同様、「絵画的特徴づけ」と「美的特徴づけ」それぞれの対象に注目し、この一節を知覚的特性と美的特性について述べたものとして捉え返すならば、ここでのペティットの主張は「美的特性は知覚的特性にスーパーヴィーンする」というものであると解されることになる。

美的特性が知覚的特性にスーパーヴィーンするとき、それは以下のことを含意する。

(1)二つの対象が知覚的特性の点で同一（判別不可能）であるとするならば、両者は美的特性の点でも同一（判別不可能）である。

この命題の対偶を取るならば、以下の命題が得られる。

(2)二つの対象に美的特性の点で差異が認められる（判別可能である）とするならば、両者には知覚的特性の点でも差異が認められる（判別可能である）ことになる。

さて本節における以上の議論をまとめるならば、知覚的特性と美的特性の関係に関するペティットの理解は、両者を別個の特性と見なしたうえで、それを後者の前者に対するスーパーヴィーニエンス関係として捉える理解であると言える。

1.3 アラン・H・ゴールドマン

最後にここでは、アラン・H・ゴールドマンが

『美学必携』(2009)のために寄稿した項目「美的特性」を取り上げることにしたい。その冒頭でゴールドマンは、美的特性をその類型にしたがって大きく8つに分類し、それぞれの類型に配される美的特性のリストを掲げるのであるが、ここではそのなかの一類型「二階の知覚的特性 (second-order perceptual properties)」にとくに注目したい。

彼は、この「二階の知覚的特性」に含まれる美的特性の例として「(色や音について言われる)鮮明であること (being vivid)、または純粋であること (being pure)」を挙げる (Goldman [2009]:125f, cf. Goldman [1993]:32)⁽⁶⁾。

色や音が鮮明であることや純粋であることをゴールドマンはこのように「第二階の知覚的特性」と名づけるのであるが、このことから逆に推すならば、彼がここで(暗黙のうちに)前提としている理論構制は以下のようなものであると考えられる。すなわち、たとえばある対象に関してそれを「赤い」と知覚することが第一階の知覚であるのに対し、その対象の帯びる赤い色を「鮮やかである」と知覚することは、この第一階の知覚にもとづく第二階の知覚であると言え、したがって、第一階の知覚において問題となる特性が「第一階の知覚的特性」と呼ばれるのに対し、第二階の知覚において問題となる特性は「第二階の知覚的特性」と呼ばれることになる。ゴールドマンによれば、この第二階の知覚的特性こそ美的特性に他ならないものであることから、美的特性は知覚的特性に対して第二階の特性としてあるということになる。

こうしてゴールドマンは、狭義での知覚的特性と美的特性とを広義での知覚的特性のもとに捉える一方で、狭義での知覚的特性が一階の特性であるのに対し、美的特性(「鮮やかさ」)は狭義での知覚的特性(「赤さ」)に対する二階の特性であると見なすことで、その階層上の位置づけをもとに両特性を明確に区別することになる。

2 知覚的特性と美的特性の関係に関するあらたな理解に向けて

以上、ビアズリー、ペティット、ゴールドマンという三人の論者が美的特性と知覚的特性との関

係をいかに理解しているかという点をめぐって考察を繰り広げてきたのであるが、本章では、分析美学の伝統において主流をなす彼らの理解から一旦距離を置いて、それとはまた別の角度から知覚的特性と美的特性との関係について捉える試みを示すことにしたい。

知覚的特性と美的特性との関係をあらたに捉え返すにあたって、ここでひとつの拠り所としたいのが廣松渉の表情理論である。

2.1 廣松渉の表情理論の検討

廣松は1986年から88年にかけて岩波書店刊行の雑誌『思想』に9回にわたって掲載した「役割理論の再構築のために」の第1章においてその表情理論の骨子をはじめて提示したのであるが、その全貌が明らかとされたのは1989年に刊行された『表情』(廣松[1989])においてであった。

そこで以下では、必要に応じて適宜『役割理論の再構築のために』(廣松[2010])第1章を参照しつつも、基本的にはその著『表情』にもとづいて彼の表情理論の基本骨子を本論考と関連づけながら押さえておくことにしたい。

廣松はまず「表情」に関する自己の理解を示して以下のように述べる。

表情現相といえ、人はまっさきに、人間や動物の顔面表情のことを思い浮かべるかもしれない。だが、日本語で表情と呼ばれるものは、人間や動物の顔付や身振だけには限られていないはずである。或る種の理屈からすれば擬人法と解されようとも、ともかく、直接的な体験においては、さまざまな現相^{フェノメノン}が表情性を帯びている。(廣松[1989]:8)

つまり廣松の理解では、「表情」はたんに人間や動物の顔面表情に限定されるものではなく、いわば世界のすべてが表情を帯びているということになる⁽⁷⁾。まさにその意味で、「環界的情景は表情性に満ち充ちている」(廣松[1989]:9)と言えるのだが、廣松はこの点をわれわれの体験に即して明示するために以下の一節を掲げる。

裏山の松の樹はガッシリしているが、大枝はノ

タウッテいる。^{がけ}崖に^{くれ}かけて淡竹がスクスクと伸びており、葉先はピンと張っている。……小川はサラサラ流れ、魚はスイスイ泳いでいる。雪がヒラヒラ舞い始め、やがてシズシズ降りしきる。松はコンモリ雪帽子を被り、いよいよドッシリと落付いて見える。一陣の風がサッと捲き起こり、雪がパッと散る。が、松はカタクナに立っている。竹はタワワに軋み、雀がピョンピョン枝渡りすると、ドタドタと雪が^{こぼ}零れる。夕陽がノンビリと傾き、月影がソッと忍び寄って来る……。(廣松[1989]:9)

言うまでもなく、カタカナで記されたものが表情特性を言い表す言語表現なのであるが、ここで注目すべきは、それらが指し示している特性はいずれも美的特性、より精確に言うならば一次的美的特性として捉え返すことも可能であるという点である。

この点を明らかにするために、いま試みに、表情特性を言い表すものとして廣松の挙げる形容語をヘルメレンによる美的特性の類型学的分類(cf.Hermerén [1988], [1993])のもとに位置づけてみることにしよう(因みに、ヘルメレンは「美的特性 (aesthetic property)」ではなく、「美的性質 (aesthetic quality)」という用語を使用しているが、両者は実質的に同義のものと見なされるため、以下では彼の言う「美的性質」をすべて「美的特性」に読み替えることにする)。

ヘルメレンは、Hermerén [1988] と Hermerén [1993] において、美的特性を大きく「感情特性 (emotion properties) (表出的特性 [expressive properties])」、「行為特性 (behavior properties)」、「ゲシュタルト特性 (gestalt properties)」、「趣味特性 (taste properties)」、「反応特性 (reaction properties) (興発的特性 [affective properties])」、「自然特性 (nature properties)」という六つの類型に分ける美的特性に関する類型学的分類を呈示しているのであるが、この分類のもとに先の一節に挙げられていた表情特性を言い表す形容語を配置するならば以下ようになる。

(1) 行為特性を言い表す形容語

ノタウッテ、スクスクと、ピンと、サラサラ、

スイスイ、ヒラヒラ、シズシズ、ドッシリと、サッと、パッと、カタクナに、ピョンピョン、ドタドタと、ノンビリと、ソッと

(2) ゲシュタルト特性⁽⁸⁾を言い表す形容語

ガッシリ、コンモリ、タワワに

ここからも見て取れるように、先の一節で挙げられていた形容語は、美的特性の六つの類型のうち行為特性とゲシュタルト特性の二類型にかぎられるのだが、『表情』と『役割理論の再構築のために』には、これ以外にも数多くの形容語が挙げられていることから、それらも含めて表情特性を言い表す形容語をあらためてヘルメレンの分類にしたがって整序してみるならば、以下のようだろう(各形容語の後ろに付した数字のうち、正体で示したものは『表情』の頁数を、また斜体で示したものは『役割理論の再構築のために』の頁数をそれぞれ示す)。

(1) 感情特性 (表出的性質) を言い表す形容語

明るい (気分) (57)、暗い (気持) (57)、黄色い (声) (57)、赤い (気焔) (57)、暖かい (声) (57)、冷たい (眼) (57)、低い (声) (57)、白々^{しらしら} (57)、温々^{ぬくぬく} (57)、冷々^{ひえひえ} (57)、白々^{あつあつ} (57)、温々^{さむさむ} (57)、冷々 (57)、熱々 (57)、寒々 (57)、ブンブン (67)、メソメソ (67)、ドスグロい (14)

(2) 行為特性を言い表す形容語

ノタウッテ、スクスクと、ピンと、サラサラ、スイスイ、ヒラヒラ、シズシズ、ドッシリと、サッと、パッと、カタクナに、ピョンピョン、ドタドタと、ノンビリと、ソッと
グネグネ (10)、ニコニコ (13)、プリプリ (13)、スイスイ (57)、ノロノロ (57)、ズンズン (57)、グズグズ (57)、ブンブン (67)、メソメソ (67)、ドッカーと (14)、ソーッと (14)、ユラユラと (14)、ヒッソリと (14)、

(3) ゲシュタルト特性を言い表す形容語

ガッシリ、コンモリ、タワワに
尖った (57)、丸い (57)

(4) 趣味特性を言い表す形容語

カワイラシイ (14)⁽⁹⁾

(5) 反応特性 (興発的特性) を言い表す形容語

尖った (味) (57)、丸い (味) (57)⁽¹⁰⁾、ハレバレ (67)、ゾクッと (81)、サワヤカナ (14)、スガスガシイ (14)、カワイラシイ (14)

(6)自然特性を言い表わす形容語

明るい (57)、暗い (57)、ピカッ (57)、キラッ (57)、テカッ (57)、チカッ (57)、ピカピカ (57)、キラキラ (57)、テカテカ (57)、チカチカ (57)、白々 (57)、黒々 (57)、赤々 (57)、青々 (57)、ネバネバ (57)、スベスベ (57)、ベトベト (57)、ツルツル (57)、温々 (57)、冷々 (57)、熱々 (57)、寒々 (57)、コチコチ (57)、フワフワ (57)、ゴワゴワ (57)、ブワブワ (57)、長々 (57)、短々 (57)、広々 (57)、細々 (57)、暖かい (57)、冷たい (57)、高い (57)、低い (57)、ザラザラ (123)、ドスグロい (14)、ゴツゴツ (17)、ジメジメ (17)、カラカラ (17)、グジグジ (17)、サラサラ (17)⁽¹¹⁾

表情特性を言い表す形容語の上に示した分類において、いくつかの形容語は複数のカテゴリーにまたがって分類されているが、こうした事態は、それらの形容語が①一義的な分類が不可能であるか (e.g.「プンプン」、「メソメソ」)、あるいは②メタファー的な拡張⁽¹²⁾によって字義的な使用法におけるのとはまた別のカテゴリーに分類されうる (e.g.「明るい」、「暗い」) ことに起因する。

このように、表情特性を言い表すものとして廣松の挙げる種々の形容語をヘルメレンによる美的特性の類型学的分類をもとに整序し直すことが可能であることから明らかなように、廣松の考える表情特性は (そのほとんどすべてが)、われわれの視点からすれば一次的美的特性として捉え返すことも可能なのだが、すでにご賢察のことと思われるが、本論考における方法論上の基本戦略は、この事実をひとつの接合点として、廣松の表情理論を美的特性理論に接木することで、その表情理論に依拠して知覚的特性と美的特性との関係についてあらためて考えてみることにある。

さて、議論を本筋に戻して、廣松の表情理論の基本骨子についてさらにみてゆくことにしよう。廣松は表情性の覚知と事物性の覚知との関係についてつぎのように述べる。

直接的な体験意識に即するとき、事物 (というものが在ってそれ) が表情性を帯びている、という表現方式は実態に合わない。〔…〕原基的

にはむしろ、グネグネしているあれ、スクスク伸びているこれ、の覚知が先であって、その覚知と件が松・竹として事物的に認知・命名されるというのが実情であろう。

(廣松[1989]:9-10)

この一節をわれわれの論脈のもとで大雑把に捉え返すならば、(一次的) 美的特性の感受は対象認知、すなわち (狭義での) 知覚に先立つということになる。

廣松は、「如実の体験者当人にとっては現相の表情性体験は直截的・原基的な体験事実である」(廣松[1989]:13) ことを強調するのであるが、これに対し旧来の理解では、最初に音や形や色に関する感覚的体験、すなわち (狭義での) 知覚があり、これを機縁として感情や行動が生起するという構制で事態を捉えるのが一般的である (廣松[1989]:13)。こうした旧来の理解にしたがえば、表情感得とは「形や色や音などの感覚という第一次的なと件を手掛かりにして第二次的に生じるもの」(廣松[1989]:14) ということになる。すなわち「まず最初に感覚的な認知という体験があり、それの上に、情意的意識体験や、身体的行動的反応が、付け加わる」(廣松[1989]:14) という具合である。

こうした見方に抗して廣松はつぎのように述べる。

しかしながら、体験的意識事実の問題として言えば、最初から情意的要因が感覚的体験に籠っていたり、時によっては、反射的行動が先行して事後的に感覚や感情が意識にのぼったり、このようなケースも存在する。体験的意識事実在即する限り、必ずしも認知→情意→行動という継起的順序に恒になっているわけではない。〔…〕実際の体験においては、知情意が“融合”している。〔…〕現実の体験に即するかぎりでは、つまり、理論的分析・整理の結果 (例えば、外因性の感覚と内因性の情意といった理論的区別) を述べ立てるのではなく当事者の体験的意識事実在即して言うかぎり、俗に第一次的な感覚体験と呼ばれるものが既に情意的に彩られている。(廣松[1989]:15)

廣松のこの立言が体験当事者であるわれわれの体験的意識事実に立脚したものである点にまずは留意する必要がある。すなわち廣松がここで採っている基本的スタンスは、われわれの体験的意識事実を知的反省にもとづく理論的分析をととして事後的に再構成して示す学的構成主義のそれではなく、あくまで今現に体験している当事者の体験的現相をあるがままの姿で掬い上げようとする体験現相主義のそれであると言えるのである。廣松はこうした体験現相主義の立場から、表情感得においては「認知」、「情意」、「行動」という三契機が融合相にあることを強く主張する⁽¹³⁾。

廣松は、表情に関するこのあらたな理解を踏まえて、つぎのように結論づける。

われわれに言わせれば、「純然たる知覚相」などというものは如実には存在せず、如実の現相はその都度すでに“情意的な契機を孕んで”おり、本源的に表情的である。より正確に言えば、如実の環境世界的現相は本源的に情動的価値性を“懐胎”せる表情的現相である。従って、表情性現相は汎通的である。

(廣松[1989]:17)

2.2 廣松渉の表情理論にもとづく知覚的特性と美的特性の関係の捉え返し

以上廣松の表情理論の基本骨子を確認してきたのだが、つぎにここでは、この廣松渉の表情理論にもとづいて知覚的特性と美的特性の関係をあらたに捉え返す試みを示すことにしたい。

まずは、廣松の表情理解を踏まえながらも、それを本論考の論脈である美的特性論の枠組みのうちで理論的に整合化することを企図して、彼の表情理論を構成する基本的な概念装置に対して以下のような微調整を施しておくことにする。

- (1) 表情感得作用を構成する一契機である「情意」を美的感受 (aesthetic sensing)、すなわち美的特性の感受作用として捉え返す⁽¹⁴⁾。
- (2) 同じく表情感得作用を構成する一契機である「行動」を行動態勢、すなわちある行動が発現するにあたって必要とされる心身の「構え」、「姿勢」として捉え返す。換言するならば、表情感得作用にあって問題となるのは、実際に発現した現

実的・顕在的な行動それ自体ではなく、そうした行動に向かう潜在的可能性としての傾性・性向 (propensity) であると考えられるのである⁽¹⁵⁾。

(3) 「認知」、「情意」、「行動」という三契機 (上記 (1) と (2) における捉え返しを踏まえるならば、「認知」、「美的感受」、「行動態勢」) の融合態である「表情感得作用」を広義での知覚として捉え返す。(4) これにともない、「表情感得作用」(すなわち「広義での知覚」) を構成する一契機である「認知」を狭義での知覚として位置づける⁽¹⁶⁾。

廣松の表情理論を構成する基本的概念装置に関する以上の調整作業を介して、彼の表情理論を美的特性理論のための基盤に据えることで、あらためて知覚と美的感受との関係を捉え返してみるならば、「広義での知覚は、狭義での知覚としての認知、美的感受、行動態勢の三契機の融合態としてある」ということになる。

この基本命題から知覚と美的感受との関係に関して以下の二点が帰結することになる。

- (1) 広義での知覚との関係について言えば、美的感受はこの広義での知覚のもとに包摂される⁽¹⁷⁾。
- (2) 狭義での知覚、すなわち認知との関係について言えば、美的感受は認知と融合相にある⁽¹⁸⁾。

また、上記の二点を知覚的特性と美的特性との関係という側面から捉え直すとするならば、それは以下ようになる。

- (1) a 広義での知覚的特性との関係について言えば、美的特性はこの広義での知覚的特性のもとに包摂される⁽¹⁹⁾。
- (2) a 狭義での知覚的特性、すなわち認知的特性との関係について言えば、美的特性は認知的特性と融合相にある⁽²⁰⁾。

また、この点を本論考 0.2 に挙げた色彩の例、具体的には A の色彩 (0/0/100) に即して述べるならば以下ようになる。

- (1) b A を知覚することは同時にたとえば「重々しさ」という美的特性を感受することを意味する。
- (2) b 「青さ」という知覚的特性と「重々しさ」という美的特性とは融合相にある。換言するならば、われわれが (広義で) 知覚するのはあくまで「重々しい青」もしくは「青の重々しさ」なのである。

2.3 同一特性のもつ二つのアスペクトとしての知覚的特性と一次的美的特性

以上われわれは、廣松渉の表情理論に依拠して、知覚的特性と一次的美的特性との関係をあらたに捉え返すことを試みてきたのであるが、それをとおして得られたあらたな理解にもとづくならば、知覚的特性と一次的美的特性との両者は、同一特性のもつ二つのアスペクトとして捉える可能も拓けることになる。本節の第一の狙いはこの点を論証することにある。

2.3.1 同一特性二アスペクト条件

一般に、二つの特性 P と Q に関して、それらが同一特性のもつ二つのアスペクトであるための条件は、「(現実世界において⁽²¹⁾) 特性 P と特性 Q が同一の外延を有す⁽²²⁾」というものであると考えられる(以下この条件を「同一特性二アスペクト条件」⁽²³⁾と呼ぶことにする)。

特性 P と特性 Q が同一の外延を有するとき、「すべての対象 x に関して、それが特性 P をもつならばそれは特性 Q をもち、かつ、それが特性 Q をもつならばそれは特性 P をもつ」という事態が成立することになる。

このことを記号表現するならば以下のようになる。

$$\textcircled{1} \forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$$

以下ではこの論理式を便宜的に「同一特性二アスペクト条件の定式」と名づけることにするが⁽²⁴⁾、この「同一特性二アスペクト条件の定式」はつぎの②の論理式と同値である。

$$\textcircled{2} \forall x(Px \equiv Qx)$$

この同一特性二アスペクト条件を満たす特性として、「四角形であるという特性」と「四辺形であるという特性」が挙げられるが、以下ではこれを例に上に述べた点について具体的に説明しておくことにしよう。

すべての対象に関してそれが「四角形であるという特性」をもつとするならば、それは同時に「四辺形であるという特性」をもつことになり、また逆に、すべての対象に関してそれが「四辺形であるという特性」をもつとするならば、それは同時に「四角形であるという特性」をもつことになる。

これは要するに、すべての対象に関してそれが「四角形であるという特性」をもつことと「四辺形であるという特性」をもつことが同値であることを意味する。

「四角形であるという特性」と「四辺形であるという特性」が同一特性二アスペクト条件を満たすということは、取りも直さず、両特性があるひとつの特性、この場合は、ある種の幾何学的特性のもつ二つのアスペクトであるということの意味する。

2.3.2 同一特性二アスペクト条件にもとづく知覚的特性と一次的美的特性との関係に関するあらたな理解の検討

以上同一特性二アスペクト条件を呈示するとともに、それに関して若干の説明をおこなったのであるが、それでは翻って、知覚的特性と一次的美的特性との関係についてわれわれがあらたに示した理解は、この同一特性二アスペクト条件に照らすならば、いかに捉えられるのであろうか。以下では、廣松渉の表情理論に依拠してわれわれがあらたに呈示した知覚的特性と一次的美的特性との関係に関する理解を、同一特性二アスペクト条件のもとに捉え返してみることにしたい。

(1) 広義での知覚的特性と一次的美的特性との関係

まず広義での知覚的特性と美的特性との関係についてであるが、われわれの理解では、一次的美的特性は認知的特性(狭義での知覚的特性)、行動態勢特性とならんで広義での知覚的特性を構成する一契機としてこの広義での知覚的特性のもとに包摂される。

仮にこのことを、広義での知覚的特性 P は、一次的美的特性 Q、認知的特性 R、行動態勢特性 S からのみなる、逆に言うならば、諸特性に関するこれ以外の組み合わせからは広義での知覚的特性 P は成立しえないということの意味するものと解するならば、すべての対象 x について、それが広義での知覚的特性 P をもつとするならば、それは同時に一次的美的特性 Q、認知的特性 R、行動態勢特性 S をもち、かつ、すべての対象 x について、それが一次的美的特性 Q、認知的特性 R、行動態勢特性 S をもつとするならば、それは同時に広義での知覚的特性 P をもつという

ことになる。

このことを記号表現するならば以下のようになる。

$$\textcircled{1} \forall x[(Px \rightarrow (Qx \wedge Rx \wedge Sx)) \wedge [(Qx \wedge Rx \wedge Sx) \rightarrow Px]]$$

この①の論理式はつぎの②の論理式と同値である。

$$\textcircled{2} \forall x[Px \equiv Qx \wedge Rx \wedge Sx]$$

縮小律により①の論理式からつぎの③の論理式が得られる。

$$\textcircled{3} \forall x[Px \rightarrow (Qx \wedge Rx \wedge Sx)]$$

そして同じく縮小律によりこの③の論理式からつぎの④の論理式が得られる。

$$\textcircled{4} \forall x(Px \rightarrow Qx)$$

一方、2.2でも述べたように、われわれの理解では、一次的美的特性 Q、認知的特性 R、行動態勢特性 S の三者は融合相にあるということになるが、そのときすべての対象 x に関して、x が一次的美的特性 Q をもつとするならば、x は同時に認知的特性 R、行動態勢特性 S をもつことになる。

このことを記号表現したものがつぎの⑤の論理式である。

$$\textcircled{5} \forall x[Qx \rightarrow (Rx \wedge Sx)]$$

この⑤と同値の論理式としてつぎの⑥の論理式が構成される。

$$\textcircled{6} \forall x[Qx \rightarrow (Qx \wedge Rx \wedge Sx)]$$

この⑥と②から、つぎの⑦の論理式が得られる。

$$\textcircled{7} \forall x(Qx \rightarrow Px)$$

この⑦と④から、つぎの⑧の論理式が構成される。

$$\textcircled{8} \forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$$

この⑧の論理式は同一特性二アスペクト条件の定式に他ならないことから、広義での知覚的特性と一次的美的特性は同一特性二アスペクト条件の定式を満たし、したがって両者は同一特性のもつ二つのアスペクトであるということになる。すなわち、広義での知覚的特性は広義での知覚的特性全体のアスペクトであるのに対し（これはある意味自明の理であるが）、一次的美的特性はこの広義での知覚的特性のもつ部分的アスペクトであると解されるのである。

(2)狭義での知覚的特性（認知的特性）と一次的美

的特性との関係

つぎに取り上げるのは、狭義での知覚的特性、すなわち認知的特性と一次的美的特性の関係についてである。

上の(1)でも述べたように、われわれの理解では、一次的美的特性は認知的特性と融合相にあるということになるが、このときすべての対象 x に関して、x が認知的特性 P をもつとするならば、x は同時に一次的美的特性 Q をもつことになり、また逆に、x が一次的美的特性 Q をもつとするならば、x は同時に認知的特性 P をもつことになる。

このことを記号表現するならばつぎの①の論理式が得られる。

$$\textcircled{1} \forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$$

これはまさに同一特性二アスペクト条件に他ならない。

ここからも明らかなように、狭義での知覚的特性（認知的特性）と美的特性は、同一特性二アスペクト条件を満たすものであるため、両特性は広義での知覚的特性という同一の特性のもつ二つのアスペクトであると結論づけられることになる。

2.3.3 同一特性二アスペクト条件にもとづく諸家の議論の検討

本稿1では、ビアズリー、ペティット、ゴールドマンという三人の論者を取り上げ、知覚的特性と美的特性の関係について各人がそれぞれいかなる理解を示しているかを明らかにしたのであるが、本節では、同一特性二アスペクト条件に照らして、あらためて両特性の関係をめぐる彼らの議論を検討してみることにしたい。

(1)モンロー・C・ビアズリー

1.1に見たように、ビアズリーは、美的特性をもちうるのは構造化された全体としての「複合的な色彩デザイン」のように「領帯的性質」を具えたもののみであって、その全体を構成する要素である「個々の同質的な色斑」のように「局所的性質」しか具えないものは美的特性をもちえないと主張するのであるが、言うまでもなく「個々の同質的な色斑」は知覚的特性をもつため、彼の主張から、「局所的性質」しか具えないものは、知覚的特性はもつが美的特性はもたないということが

帰結する。

以上の点をまとめるならば、(領帶的性質は具えず)局在的性質のみを具えた対象は、知覚的特性 P はもつものの美的特性 Q はもたないということになるが、これを広く捉え返すならば、知覚的特性 P はもつが美的特性 Q をもたないものが存在するということを意味する。

このことを記号表現するならばつぎの①の論理式が得られる。

$$\textcircled{1} \exists x(Px \wedge \neg Qx)$$

この①の論理式はつぎの②の論理式と同値である。

$$\textcircled{2} \neg \forall x(Px \rightarrow Qx)$$

一方、同一特性二アスペクト条件の定式である $\forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$ から、縮小律をとおして、つぎの③の論理式が導き出される。

$$\textcircled{3} \forall x(Px \rightarrow Qx)$$

言うまでもなく、③の論理式は②の論理式と二律背反の関係にある。

以上のことから、知覚的特性と美的特性に関するピアズリーの理解は同一特性二アスペクト条件を満たさず、したがって彼の理解のもとでは、両特性は同一特性の二つのアスペクトではなく、それぞれ別個の特性と見なされることになる。

(2) フィリップ・ペティット

1.2 に示したように、ペティットの議論をわれわれの論脈において捉え返すとき、彼が「美的特性は知覚的特性にスーパーヴィーンする」と考えていたことが明らかとなる。美的特性が知覚的特性にスーパーヴィーンするとき、それが含意するところのものをここであらためて確認しておくならば、それは以下の命題にまとめられる。

「二つの対象 a と b が知覚的特性の点で同一(判別不可能)であるとするならば、両者は美的特性の点でも同一(判別不可能)である。」

この命題をさらに分析的に解釈するならば、つぎの命題が得られる。

「対象 a と b に関して、a が知覚的特性 P をもつとするならば、a は美的特性 Q をもつことになり、かつ、b が知覚的特性 P をもつとするならば、b は美的特性 Q をもつことになる。」

この命題を記号表現するならば以下のようになる(以下では便宜的に①の論理式を「スーパー

ヴィーニエンスの定式」と呼ぶことにする)。

$$\textcircled{1} (Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb) \quad (25)$$

縮小律によるならば、①から②の論理式が導き出される。

$$\textcircled{2} Pa \rightarrow Qa$$

ところで、②は③の論理式を含意しない⁽²⁶⁾。

$$\textcircled{3} Qa \rightarrow Pa$$

これを一般化するならば、知覚的特性 P をもつならば美的特性 Q をもつとしても、美的特性 Q をもつからといって必ずしも知覚的特性 P をもつわけではないある対象が存在するということになる。

このことを存在量子子を用いて記号表現したものがつぎの④の論理式である。

$$\textcircled{4} \exists x[(Px \rightarrow Qx) \wedge \neg(Qx \rightarrow Px)]$$

あらためて言うまでもなく、この④の論理式は同一特性二アスペクト条件の定式である $\forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$ と二律背反の関係にある。

以上のことから明らかなように、知覚的特性と美的特性との関係を後者の前者に対するスーパーヴィーニエンス関係と捉えるペティットの理解は、同一特性二アスペクト条件を満たすものではなく、そのかぎりにおいて彼の理解のもとでは、知覚的特性と美的特性は同一特性のもつ二つのアスペクトではなく、それぞれ別個の特性と見なされることになる。

(3) アラン・H・ゴールドマン

1.3 に見たように、ゴールドマンは、狭義での知覚的特性と美的特性の両者を広義での知覚的特性のもとに捉える一方で、狭義での知覚的特性(e.g.「赤さ」)が一階の特性であるのに対し、美的特性(e.g.「鮮やかさ」)は狭義での知覚的特性に対する二階の特性であると見なすのであるが、彼のこうした理解は、それだけでは同一特性二アスペクト条件を満たすものであるか否かを確定することが難しく、これを確定するにはその背景に位置する理論的基盤を明らかにしなければならない。

そうした理論的基盤にあたるものが、ゴールドマンが美的特性一般のための定式として呈示する以下の命題であると考えられる。

「対象 O が美的特性 P をもつ」ということは、「O はそれが帯びるより基礎的な特性 B によって (in virtue of) V という種類の理想的な観者に R という種類の反応を引き起こすようなものである」ということを意味する。

(Goldman [2009]:126f, cf. Goldman [1995]:21)

これが美的特性一般のための定式であるとするならば、二階の知覚的特性としての美的特性もまたこの定式のもとに捉え返すことが可能となり、そのとき「より基礎的な特性 B」にあたるものが一階の知覚的特性であると見なされることになる。すなわち、一階の知覚的特性は二階の知覚的特性としての美的特性にとってその基盤特性をなすものと考えられるのである。こうした理解にしたがうならば、知覚的特性と美的特性は、後者が前者に依存する関係にあると解される。

知覚的特性と美的特性との関係をこのように後者の前者に対する依存関係として捉えるならば、以下のようになる。

「対象 a が美的特性 Q をもつこと (すなわち Qa) が対象 a 知覚的特性 P をもつこと (すなわち Pa) に依存するとするとき、 $Qa \rightarrow Pa$ は成り立つ (すなわち Pa は Qa にとってその必要条件である) が、 $Pa \rightarrow Qa$ は成り立たない ($\neg(Pa \rightarrow Qa)$ 、すなわち Qa は Pa にとってその必要条件ではない)。」⁽²⁷⁾

このことをまとめれば以下の論理式が得られる。

① $\neg(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Qa \rightarrow Pa)$

この①を全称化するならば、つぎの②の論理式が得られる。

② $\neg \forall x (Px \rightarrow Qx) \wedge \forall x (Qx \rightarrow Px)$

この②の論理式は、同一特性二アスペクト条件である $\forall x [(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$ と二律背反の関係に立つ。したがって美的特性が知覚的特性に依存する場合、両特性は二アスペクト条件両特性を満たさないため、両者を同一特性のもつ二つのアスペクトと見なすことはできず、それらはあくまで別個の特性であるということになる。

2.4 知覚的特性と美的特性とを別個の特性と見なす立場に対する批判的考察

以上われわれは、廣松渉の表情理論にもとづい

て、知覚的特性と美的特性との関係に関するあらたな理解を呈示するとともに、このあらたな理解について同一特性二アスペクト条件に照らして検討を加えたのであるが、ここでは両特性に関するこのあらたな理解に立脚して、両特性を別個の特性と見なす旧来の理解に関して批判的考察を加え、それをとおしてそうした理解の根柢に潜む問題性を明らかにしたい。

2.4.1 学的構成主義の問題

第一に指摘しなければならないのは、知覚的特性と美的特性とを別個の特性と見なす理解が、廣松がその表情理論で採用したような、いままさに体験している当事者の体験的現相をあるがままの姿で掬い上げようとする体験現相主義ではなく、われわれの体験的意識事実を知的反省にもとづく理論的分析をとおして事後的に再構成して示す学的構成主義にもとづくものであるという点である。

この点について、とくにアラン・H・ゴールドマン (Goldman [2009]) の議論をもとに確認しておきたい。

1.3 にも見たように、ゴールドマンは、狭義での知覚的特性と美的特性の両者を広義での知覚的特性のもとに捉える一方で、狭義での知覚的特性 (e.g. 「赤さ」) が一階の特性であるのに対し、美的特性 (e.g. 「鮮やかさ」) は狭義での知覚的特性に対する二階の特性であると見なすのであるが、こうした理解の背景にある理論構制は、「赤さ」という一階の知覚的特性と「鮮やかさ」という一次的美的特性とをそれぞれ別個のものとして截然と分ける仕方で、われわれはまず「赤さ」を知覚し、しかる後に「鮮やかさ」を感じるという二段構えのものであると推定される。

こうした理論構制にもとづく説明的記述は、赤を目にした際のわれわれの体験的意識事実とは大きく隔たったものと言わなければならない。実際にわれわれが赤を目にすると、われわれは「赤さ」と「鮮やかさ」とをそれぞれ別個の特性として感受するのではなく、その対象を「鮮やかな赤」もしくは「赤の鮮やかさ」として、まさに渾然一体化した相のもとに感受する。ゴールドマンの描像は、われわれのこうした体験的現相から、

知覚的反省をとおして事後的に析出された知覚的特性と一次的美的特性という二つの特性を、あたかも原初的要素特性であるかのように仮構することで、これをもとに一次的美的特性の現出様態を再構成して見せたものに他ならないと言えるのである。

ゴールドマンの理論構制のうちに端的に見てとることのできる学的構成主義は、それがわれわれの体験の意識事実を歪曲するものであるかぎりにおいて、現象学（phenomenology）⁽²⁸⁾の立場から美的特性理論の構築を企図する際には、こうした学的構成主義は厳に斥けられなければならない。

2.4.2 美的特性の階層構造に関する理解の欠如

つぎに指摘しておかなければならないのは、美的特性を階層構造論的に捉える視点の欠如が知覚的特性と美的特性とを別個の特性と理解することの一因ともなりうるという点である。

われわれは、知覚的特性と美的特性との関係について、①広義での知覚的特性との関係について言えば、美的特性はこの広義での知覚的特性のもとに包摂され、②狭義での知覚的特性、すなわち認知的特性との関係について言えば、美的特性は認知的特性と融合相にあると捉えるのであるが、これはあくまで一次的美的特性にかぎってのことであって、二次以降の高階美的特性についてはそのかぎりではない⁽²⁹⁾。

（意味論的）高階美的特性は、本質的に、意味論的コンテクストとしての参照枠に相対的であるため、同一の知覚的特性に対してその参照枠が異なるのに応じてそれぞれ異なった高階美的特性が帰結することになる。たとえば、同じ知覚的特性（ある特定の「赤さ」）をもつ色彩であったとしてもそれが見るからに美味しそうな完熟トマトの色である場合とキリストの磔刑像に描かれたその脇腹から滴り落ちる血の色である場合とでは、自ずからその（意味論的）高階美的特性は異なることになる。

同一の知覚的特性に対して異なった（意味論的）高階美的特性が帰結するということは要するに、両者の間に必然的な連関がないということの意味するため、知覚的特性と（意味論的）高階美

的特性はそれぞれ別個の特性であると見なされることになる。

仮に美的特性を階層構造論的に捉えない、換言するならば、一次的美的特性と（意味論的）高階美的特性との差異に注目せず、しかも美的特性にとって範例となるものを無自覚のうちに（意味論的）高階美的特性に求めるとするならば⁽³⁰⁾、当然ながら、知覚的特性と美的特性（その実態は意味論的高階美的特性）とをそれぞれ別個の特性と見なすことになる。

以上のことから明らかなように、美的特性を階層構造論的に捉える視点の欠如が原因となって、そこから知覚的特性と美的特性とに関して両者を別個の特性と見なす理解が帰結しうるものと考えられるのである。

2.4.3 一次的美的特性の否認

1.1に見たようにピアズリーは、その論考「美的性質とは何か」において、美的特性をもちうるのは領帶的性質を具えたもののみであって、局所的性質しか具えないものは美的特性をもちえないと主張するのであるが、彼のこうした理解にしたがうならば、われわれの言う一次的美的特性が局所的性質しか具えないものである以上、それは本来美的特性ではなく、真に美的特性たりうるものはあくまで高階美的特性、より厳密に言うならば、構造的高階美的特性のみであるということになる。

それでは、一次的美的特性の存在それ自体を否認するピアズリーのこうした理解はいかに捉えればよいのだろうか⁽³¹⁾。

ピアズリーのこうした理解は、以下の論証に依拠するものであると推断される。

【前提1】すべての美的特性は非美的特性を基盤としてそこから創発する創発特性（emergent properties）である（cf. Beardsley [1981]:83-5）。

【前提2】すべての創発特性は局所的性質を基盤とする領帶的性質を帯びる。

【前提1】と【前提2】から

【中間結論1】すべての美的特性は領帶的性質を帯びる。

【前提3】すべての特性は局所的特性かまたは領帶的特性かのいずれかを帯びる。

【中間結論 1】から

【中間結論 2】領帶的性質を帯びないものは美的特性ではない。(【中間結論 1】の対偶命題)

【前提 3】と【中間結論 2】から

【最終結論】局所的性質を帯びるものは美的特性ではない。

この論証において問題となるのは言うまでもなく【前提 2】である。レヴィンソンも指摘するように (Levinson [1983/1990]:146-8)、領帶性 (regionality) とはより基礎的な知覚的諸条件との対比における知覚的特性のもつ性質であるのに対し、創発 (emergence) とはそれがスーパーヴィーンする、必ずしも知覚的なものとはかぎらない基盤との対比において、ある特性のもつ性質であることから、両者は本来別個の性質であると言える。すなわち、局所的なものであっても創発特性を帯びうる (ということはすなわち創発特性のうちには領帶的性質を帯びないものも存在する) のであり、また逆に、領帶的なものであっても創発特性を帯びないものもあるのである。

以上のことから明らかなように、【前提 2】は端的に誤りであると断ぜられる。誤った前提にもとづく論証は当然ながら棄却され、したがって仮にも一次的美的特性の存在それ自体を否認するピアズリーの理解がそうした誤謬論証に依拠するとするならば、ピアズリーの理解それ自体が厳しく斥けられることになる。

百歩譲ってそれが依拠する論証は不問に付すとしても、一次的美的特性の存在を否認するピアズリーのこうした理解はそれ自体がわれわれの体験的意識事実には照らすならば到底受け入れられるものではない。そもそもピアズリーは、その生涯をとおして一度なりとも色彩や音それ自体のもつ美しさに心を奪われたことはないともいうのだろうか。(まさかそんなことはないと思うが) 万が一にもそうであったとするならば、彼はいわば「美学上のゾンビ (aesthetic zombie)」⁽³²⁾ の縁者ということになり、そもそも美的特性に関する彼の理解を云々すること自体が骨折り損ということになってしまう。

個々の同質的な色や音のような「局所的性質」しか具えないものに美的特性を認めないピアズリーの立場に対して、同様の (ある意味素朴な)

疑義を唱えた論者にマルシア・ミュルダー・イートンがいる (その意味で、彼女は知覚的特性と一次的美的特性とをそれぞれ別個の特性とは見なさない例外的な論者と言える)。そこで、ここでは彼女のことばを引いてピアズリーに対する批判としたい。

多くの論者が色彩に関する言明は美的な (aesthetic) ものではないと想定しているという事実、私はつねに困惑してきた。私が思うに、ある種の色彩について人々がその好みや評価 (appreciation) を表明することはごくあたりまえのことである。「春先、あたり一面を染め上げるあの緑色が好き」という発言は、私には、まったく美的なものに思える。同じことは、「この赤は非常にドラマティックだ」という発言にも言える。しかしながら、おそらく「ペティットをはじめとする」多くの論者達は、これを否定して、これらの発言は、厳密に言うならば、記述 (descriptions) に過ぎないと言うだろう。いずれにせよ、もしこれが論ずるに足らない問題であると言うのであれば、その論証が必要となろう⁽³³⁾。

(Eaton [1994]:386*l-r*)

上に書いたように、彼ら「ペティットやピアズリーら」は、たんに読者の直感 (intuitions) に訴えるだけであるが、少なくとも私はそうした直感をつねに共有するわけではない。たとえば、色彩は美的特性ではないとか、「デザイン」の「大きさ」の美的帰属 (aesthetic attributions) と「デザイン」それ自体の非美的帰属 (non-aesthetic attributions) との間に明確に一線が画されるといったベンダーのア・プリオリな主張を私は受け入れることができない。[...] ある場合は色彩それ自体が美的帰属の焦点をなすように見える——たとえばたんに「あの青い影」に関して。他の場合には、「春の緑」のように、連想 (associations) が強調されるか、「荒れ狂う赤」のように——情動 (emotions) が関与する、あるいはまた「精妙に均衡を取られたパステル調の色彩」のように——構成上の分析 (compositional analysis) が言

及される。このように色彩帰属は、さまざまなコンテキストにおいて使用され、さまざまな種類の記述をおこなう。色彩を非美的であるとして直ちに斥けることは深刻な間違いである⁽³⁴⁾。
(Eaton [1994]:390)

3 残された問題

われわれは本論考において、廣松渉の表情理論をひとつの手がかりとして知覚的特性と美的特性との関係をあらたに捉え返す試みを示したのであるが、両特性の関係に関してわれわれが呈示した理解には実はひとつ大きな問題が潜んでいると言わなければならない。その問題とは以下のようなものである。

われわれの理解では、美的特性は、認知的特性、行動態勢特性と融合するかたちで広義での知覚的特性のうちに包摂されることになるのだが、現実の状況的脈絡（実践的連関）においては通常、美的特性が顕在化することはむしろまれであり、仮に顕在化したところで瞬時のうちに認知的特性もしくは行動態勢特性、あるいはその両者のうちに回収・消尽されてしまうことになる⁽³⁵⁾。

つまりわれわれの理解にしたがうかぎり、美的特性は美的特性という、対象のもつ他のさまざまな特性とは異なった独自の性格を具えた特性として存立することがきわめて困難なものとなり、極言するならば、美的特性それ自体の存在がきわめて疑わしいものとなってしまうのである。

それでは、美的特性はいかなる仕方で美的特性として存立が可能となるのか。ここでは、この問題を考えるにあたって少なくとも現時点ではもっとも見込みがあると思われる方向性を取り上げ、その基本骨子を示すことにしたい⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾。

いまま指摘したように、現実の状況的脈絡（実践的連関）においては通常、美的特性が顕在化することはむしろまれであり、仮に顕在化したところで美的特性は瞬時のうちに認知的特性もしくは行動態勢特性、あるいはその両者のうちに回収・消尽されてしまうことになるのだが、こうした事態を防ぐには、広義での知覚を現実の状況的脈絡（実践的連関）から切り離すことが必要となる。現実の状況的脈絡（実践的連関）からのこうした切り離しは、一種の態度変更として捉えることが

可能であるが、こうした態度変更の結果として成立するある特異な態度がいわゆる「美的態度 (aesthetic attitude)」⁽³⁸⁾ であると言える。

美的態度をとおして広義での知覚の構成契機である現実的認知的特性、現実的行動態勢特性は一種の「中立性変容 (Neutralitätmodifikation)」⁽³⁹⁾ を被り、その実在性格はいわば「宙吊り」にされてしまうことになる⁽⁴⁰⁾。

美的態度をとおして現実的認知的特性、現実的行動態勢特性が中立性変容を被るということは、言葉を換えれば、ここでは美的感受は①実在的な対象に対する認知作用から切り離される、あるいは対象に対する現実的認知作用から切り離される、と同時に②現実的行動への回路を遮断されるということを意味する。

したがって広義での知覚が美的態度をとおして中立性変容を被るとき、知覚者とはもっぱらその意識の焦点を美的特性に定め（このことによって、美的特性は美的特性として顕在化することになるわけだが）、美的特性それ自体の享受（すなわちそれを「味わうこと」）に専心することになる。

美的特性それ自体の享受とは、それを別な角度から捉え返すならば、美的特性を享受している主体の自己享受に他ならず、そのかぎりにおいて、それは必然的に根源的生命感情（あるいは存在感情）としての快（すなわち自己が自己として生きている〔存在している〕ことの喜び）をともなうことになる。

以上が先の問いに対する現時点での回答ということになるが、あらためて言うまでもなく、筆者に課された今後の課題は、本論考では基本骨子を示すにとどまった以上の議論をさらに細部にわたって練り上げることで、美的特性理論のさらなる深化・拡充に努めることにあると言える。

註

(1) 本来ならば、これら三つの色彩をカラー図版で呈示すべきところであろうが、印刷による精度の低い色彩再現をおこなうよりは、むしろそれぞれの色彩を読者各自で確認していただいた方が好都合であると考え、あえてカラー図版の挿入を断念した。読者諸賢のご理解を乞う次第である（因みに、それぞれの色彩を RGB 値で示したのは、PC 上で色彩を再現するにあたっての便を考

えてのことである)。

(2) Cf. 日本色彩学会[2011]:483-9.

(3) なお、紙幅の制約から今回は取り上げることを断念したが、他にもフランク・シブリー (Sibley [1965/2001])、ジェロルド・レヴィンソン (Levinson [1980/1990], Levinson [1983/1990])、ジョン・ベンダー (Bender [1987]) 等の重要な論者がいる。

(4) 高階美的特性は、その成立機序に応じて、大きく「構造的な高階美的特性」と「意味論的高階特性」とに二分される。

① 構造的な高階美的特性 (the structural higher-order aesthetic properties)

構造的な高階美的特性とは、部分としての諸要素から構成されたゲシュタルト的全体のもつ創発的美的特性を意味する。その際、部分としての諸要素のもつ美的特性が一階的美的特性であるのに対し、ゲシュタルト的全体のもつ創発的美的特性は二階的美的特性として位置づけられる。こうした部分と全体の関係は入子状に構造化されうるものであることから、二階以上の創発的美的特性を総称して構造的な高階美的特性と名づけることにする。ただし、構造論的観点から部分としての諸要素との関係で二階的美的特性と位置づけられたゲシュタルト的全体は、それが全一として捉えられるかぎりにおいて、体験者の意識事実のレヴェルでは、それ自体が一次的美的特性としてあらためて定立し直されることになる。まさにその意味で、構造的な高階美的特性は、高階美的特性としては、以下に見る意味論的高階特性に対して副次的位置を占めるにとどまるものと見なされることになる。

② 意味論的高階特性 (the semantic higher-order aesthetic properties)

意味論的高階特性とは、一次的美的特性もしくは構造的な高階美的特性が意味論的コンテクストとしての当該参照枠のもとに位置づけられることによって、そこから創発する美的特性を意味する。二階以降の美的特性も同様の意味論的メカニズムをとおして一階下の美的特性から創発することになるため、二階以降の美的特性をひとまとめにして「意味論的高階特性」と総称することにする。

(5) 「絵画の特徴づけ」に関してペティットが色彩の記述を挙げるのみであって、形態の記述を挙げていないのは一見片手落ちのようにも見えるが、実はペティットの色彩の記述に関する理解は、グッドマンの理解に直接的に由来するものであり (Pettit[1983]:17)、それによれば、色彩の記述とはそれがどのような色であるかに関す

る記述に加え、その色彩(色斑)が画面上のどこに位置するか、その空間的位置づけに関する記述をあわせもつことになる (Goodman[1976]:42)。したがって、このように理解された色彩の記述は同時に、形態に関する記述ともなりうるのである。とはいえ、形態に関するある意味要素還元主義的であるとも言えるこうした記述法が、はたして全一としてあるゲシュタルトとしての形態を完全に記述しうるものであるかという点に関しては、大いに疑問が残る。

(6) 因みにゴールドマンは、美的特性をもちうるのは唯一「領帯的性質」を見えるもののみであって、「局所的性質」しか見えないものは美的特性をもちえないというピアズリーの主張に抗して以下のように述べる。

美的特性は領帯的性質 (regional qualities) 呼ばれてきた (Beadsley [1973])、すなわち美的特性はその部分のもつ性質から創発する (emerge) 複合体のもつ性質と見なされるのであるが、色が鮮明であることや音の純粋性は単一の色や音のもつ性質に他ならない。

(Goldman [2009]:125f)

色のもつ鮮明さや音のもつ純粋さは、ゴールドマンの言うように、「単一の色や音のもつ性質」、すなわちピアズリーの言う「局所的性質」に他ならないのであるが、しかしゴールドマンは、ピアズリーとは異なり、こうした「局所的性質」としての色のもつ鮮明さや音のもつ純粋さを美的特性として捉える。「局所的性質」はあくまで構造的な高階美的特性を構成する要素にとどまるものであって、それ自体が構造的な高階美的特性を帯びることではないことから、彼の言う「二階的知覚的特性」としての美的特性は、少なくとも構造的な高階美的特性ではないということが明らかとなる。

一方でゴールドマンは、色のもつ鮮明さや音のもつ純粋さは、それを知覚するために「趣味 (taste)」を必要としないと述べる (Goldman [2009]:125r)。色のもつ鮮明さや音のもつ純粋さのような「二階的知覚的特性」としての美的特性が趣味を必要としないとするならば、これらの特性はヘルメレンの言う「趣味性質 (taste qualities)」(これを「趣味特性 (taste properties)」と呼ぶこともできよう) ではないということになる。

ヘルメレンによれば、趣味性質とは「趣味の規範 (canons of taste)」にもとづくものであるが (Hermerén [1988]:136)、この趣味の規範とは一種の意味論的コンテクストとしての参照枠をなすものと見なされることから、趣味性質とはそれ自体が意味論的高階美的特性であ

ると解される。したがって、「二階の知覚的特性」としての美的特性が趣味性質ではないということは、取りも直さず、「二階の知覚的特性」としての美的特性は意味論的高階美的特性ではないということを意味する。

美的特性に関する階層構造理論にしたがえば、美的特性は一次的美的特性と高階美的特性とに大きく二分され、後者はさらに構造的高階美的特性と意味論的高階美的特性とに二分されることになるが、以上の議論から明らかのように、ゴールドマンの理解では、色のもつ鮮明さや音のもつ純粋さのような「二階の知覚的特性」としての美的特性は、構造的高階美的特性と意味論的高階美的特性のいずれでもないことから、これは一次的美的特性に他ならないと結論づけられることになる。

(7) 『役割理論の再構築のために』においては、同様の趣旨で以下のように述べられている。

フェノメナルな体験世界は表情性に満ち充ちている。
現相界は、森羅万象、情緒価と行動価を帯びている。
(廣松[2010]:14)

(8) 「「ゲシュタルト性質」という名称は、或る複合体がその部分同士の諸関係の結果としてもつところの性質に関わるものである」(Hermerén [1988]:132) と述べていることから明らかなように、ヘルメレンは、ゲシュタルト特性を部分からなる全体のもつ特性として捉えるのであるが(したがって、ヘルメレンの理解によれば、ゲシュタルト特性はわれわれの言う構造的高階美的特性であるということになる)、ここではより緩やかに取って、ゲシュタルト特性を、形態的特性(formal properties)一般を指すものとして理解することにする(したがって、部分からなる複合体ではなく単一体であったとしても、それが何らかの形態もしくは形態の特徴をもつとするならば、ゲシュタルト特性を帯びうると見なされることになる)。

(9) 「カワイラシイ」という語については、これを趣味特性を言い表す形容語に分類するのが標準的な理解であると言えようが、「カワイラシイ」という語が指示する「かわいらしさ」という特性と「愛しさを感じる」という反応との繋がりを勘案するならば(cf. Hermerén [1988]:119-20)、この特性を反応特性(興発的特性)として捉えることもあながち不可能とは言いつけないことから、ここでは暫定的にこの「カワイラシイ」という語を趣味特性を言い表す形容語と反応特性(興発的特性)を言い表す形容語との両者に分類することにする。因みに註(6)にも述べたように、趣味特性とは意味論的高階

美的特性と見なされることから、「カワイラシイ」という語を趣味特性を言い表す形容語に分類とするならば、それが指示する「かわいらしさ」という特性は意味論的高階美的特性であるということになる。

(10) ある種の味覚を形容する「尖った」、「丸い」という語をいずれのカテゴリーに分類するかは非常に難しい問題であるが、ここでは、これらの語が指示する特性が「尖った感じがする」、「丸い感じがする」という反応を引き起こすことと解することで、これらを便宜的に反応特性(興発的特性)を言い表す形容語に分類することにする。

(11) 表情特性を言い表す形容語として廣松の挙げるものには、擬音語と夥しい数の擬態語が含まれているが(擬音語:「ドタドタと」、擬態語:「プンブン」、「メソメソ」、「スクスクと」、「ピンと」、「サラサラ」、「スイスイ」、「ヒラヒラ」、「シズシズ」、「ドッシリと」、「サッと」、「パッと」etc.)、荳阪[2010]は、こうした擬音語、擬態語を「感性のことば」もしくは「クオリアのことば」と捉えたうえで(荳阪[2010]:156)、これらの語に関して認知心理学および脳科学の側面からアプローチを試みている。

(12) 山梨は、メタファー的な拡張のひとつの様相を共感覚による原感覚の比喩と捉え、それをもとに共感覚的なメタファーの論理を明らかにしている(山梨[1988]:57-61)。

(13) 廣松はこの一節で「体験的意識事実^①に即する限り、必ずしも認知→情意→行動という継起的順序に恒^②になっているわけではない」と述べるのであるが、この点を車の運転というごく日常的な場面に即して解説するならば以下になるだろう。たとえば注意散漫状態で車を運転しているドライバーの眼前で突然信号が赤に変わったときに当人の身に起こる事態の説明として、彼は信号が赤であることに気づき(認知)、ハッとして(情意)、あわててブレーキを踏む(行動)といった三段階の継起的過程にもとづく説明がしばしばなされるが、しかし、当人の体験的意識事実^①に即すならば、ハッとすること(情意)が他に先んずる場合の方がむしろ一般的であろうし、場合によってはまずは急ブレーキを踏み(行動)、その直後にハッとする(情意)と同時に信号が赤であることに気づく(認知)ことすらあろう。問題は、それぞれの契機^③の先後関係ではなく、いずれの契機が先行しようとするかは他の契機と「未分化的統一の相」において融合しているという点にある(cf. 廣松[1989]:80-5)。

(14) 廣松によれば「情意」の対象は「感情興発価」であるということになるが(廣松[1989]:33)、美的感受の対象である美的特性のすべてが感情興発価を具えるわけ

ではないことから、感情興発価と美的特性とをただちに同一視することはできない（とはいえ、もしかしたら、少なくともその原初の発現形態においては、美的特性はすべて感情興発特性であったと想定することもあながち的はずれとは言えないのかもしれない）。

(15)『役割理論の再構築のために』においては、表情感得作用を構成する一契機として「行動」ではなく、「行動性向」、「反応的態勢」（廣松[2010]:14）、「反応的性向」（廣松[2010]:17）が挙げられている。なお、「行動」に対応する対象的契機を廣松は「行動誘起価」と名づけるのであるが（廣松[1989]:33）、廣松の言う「行動」を「行動態勢」と捉え返すことに呼応して、「行動態勢」に対応する対象的（ノエマ的）契機を「行動態勢特性」と呼ぶことにする。

(16) あらためて言うまでもなく、狭義での知覚としての「認知」に対応する対象的（ノエマ的）契機が狭義での知覚的特性に他ならない。

(17) 言うまでもなく、美的感受とならんでこの広義での知覚のもとに包摂されるものに、認知と行動態勢がある。

(18) そもそも広義での知覚は、認知、美的感受、行動態勢の融合態であるのだから、美的感受はたんに認知とのみ融合相にあるのではなく、行動態勢とも融合相にあるということになる。

(19) 言うまでもなく、美的特性とならんでこの広義での知覚のもとに包摂されるものに、認知的特性と行動態勢特性がある。

(20) 広義での知覚的特性は、認知的特性、美的特性、行動態勢特性の融合態であるのだから、美的特性はたんに認知的特性とのみ融合相にあるのではなく、行動態勢特性とも融合相にあるということになる。

(21) 仮に特性 P と特性 Q がたんに現実世界においてのみではなく、すべての可能世界において同一の外延を有するとするならば、そのとき両特性はたんに同一特性のもつ二つのアスペクトであるばかりではなく、両特性が同一である可能性も拓けることになる。

因みに認知的特性（狭義での知覚的特性）と一次的美的特性との関係について言えば、ある認知的特性 P とある一次的美的特性 Q が同一の外延を有するのは、あくまで現実世界においてのことであって、こうした事態がすべての可能世界において成立するとは考えにくい。逆に言うならば、認知的特性 P と一次的美的特性 Q が異なった外延を有する世界を想像することは十分可能なのである。

(22) 二つの特性が外延を共有したとしても、だからと

いて両者が内包を共有するとはかぎらないことから明らかに、これは厳密な意味での特性同一性条件ではない。

(23) 本節に示す「同一特性二アスペクト条件」はあくまで暫定的な試案にとどまる点に留意されたい。というのも、同一特性二アスペクト条件を確定するには、それと平行な関係にある特性同一性条件を確定する必要があるが、筆者はいまだこの特性同一性条件を十全な仕方では確定しえていないからである。因みに特性同一性条件については論者の立脚する立場の違いに応じてさまざまな提案がなされているが、特性同一性条件に関するそうした種々のヴァージョンについては Swoyer [2011] の第 6 節を参照されたい。

(24) 「特性 P と特性 Q が同一の外延を有す」という同一特性二アスペクト条件が $\forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$ という定式によって示されることを、D. ルイスが Lewis [1978] において示す特性に関する理解、すなわち特性を、その特性をもつ個物の集合と解する理解（「クラス唯名論（class nominalism）」の一変種）をもとに明らかにするならば、以下のようなになる（cf. 山口[2012]:108-9）。

特性 P に関して、この特性 P をもつ（現実世界における）個物の集合を D_p とする。そのとき任意の個物 a に関してつぎの同値命題が成立する（集合の要素をすべての可能世界における個物ではなく、現実世界における個物に限定するのは、註(21)に記した事情による）。

① $Pa \equiv [a \in D_p]$

特性 P に関して、この特性 P をもつ（現実世界における）個物の集合を D_p とし、特性 Q に関して、この特性 Q をもつ（現実世界における）個物の集合を D_q とするならば、特性 P と特性 Q が同一の外延を有すとは、つぎの②が成り立つことを意味する。

② $D_p = D_q$

この②が成り立つということは要するに、つぎの③が成り立つことを意味する。

③ $\forall x[(x \in D_p) \equiv (x \in D_q)]$

①により、つぎの④と⑤が成り立つ。

④ $\forall x[Px \equiv (x \in D_p)]$

⑤ $\forall x[Qx \equiv (x \in D_q)]$

この④と⑤を③に代入するならば、つぎの⑥が得られる。

⑥ $\forall x[Px \equiv Qx]$

これはつぎの⑦と同値である。

⑦ $\forall x[(Px \rightarrow Qx) \wedge (Qx \rightarrow Px)]$

あらためて言うまでもなく、この⑦はまさに同一特性

知覚的特性と美的特性との関係に関する一考察

二アスペクト条件の定式に他ならない。

(25) 因みに、スーパーヴィーニエンスの定式 $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ は $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ の論理式と同値であると言えるが、ここでのコンテキストにおいて $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ を解釈するならば、この論理式は「対象 a が知覚的特性 P をもち、かつ対象 b が知覚的特性 P をもつとするならば、対象 a は美的特性 Q をもち、かつ対象 b は美的特性 Q をもつ」(より日常的な表現でこれを言いかえれば、「対象 a と対象 b がともに知覚的特性 P をもつとするならば、両者はともに美的特性 Q をもつ」、あるいは「対象 a と対象 b が同一の知覚的特性 P をもつとするならば、両者は同一の美的特性 Q をもつ」) という内容を指し示す。

さて、スーパーヴィーニエンスの定式 $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ が $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ の論理式と同値であることを論証するには、 $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ から $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ が導出されることと、逆に、 $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ から $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ が導出されることの両方を証明しなければならない。

そこで以下では $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ から $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ の導出を証明する A と $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ から $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ の導出を証明する B との二段階に分けて論証をおこなうことにする。

A $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ から $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ が導出されることの証明

まずスーパーヴィーニエンスの定式を前提とする。

① $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$

つぎに②の論理式を仮定として立てる。

② $Pa \wedge Pb$

①から縮小律によりつぎの③の論理式が得られる。

③ $Pa \rightarrow Qa$

同じく①から縮小律によりつぎの④の論理式が得られる。

④ $Pb \rightarrow Qb$

②から縮小律により⑤の論理式が得られる。

⑤ Pa

同じく②から縮小律により⑥の論理式が得られる。

⑥ Pb

③と⑤から肯定式により⑦の論理式が得られる。

⑦ Qa

同じく④と⑥から肯定式により⑧の論理式が得られる。

⑧ Qb

⑦と⑧を合成することで⑨の論理式が得られる。

⑨ $Qa \wedge Qb$

②と⑨から⑩の論理式が得られる。

⑩ $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$

B $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$ から $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$ が導出されることの証明

まずつぎの前提を立てる。

① $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Qa \wedge Qb)$

つぎに②の論理式を仮定として立てる。

② $Pa \wedge Pb$

②から縮小律により③の論理式が得られる。

③ Pa

同じく②から縮小律により④の論理式が得られる。

④ Pb

①と②から肯定式により⑤の論理式が得られる。

⑤ $Qa \wedge Qb$

⑤から縮小律により⑥の論理式が得られる。

⑥ Qa

同じく⑤から縮小律により⑦の論理式が得られる。

⑦ Qb

②と⑥から⑧の論理式が得られる。

⑧ $(Pa \wedge Pb) \rightarrow Qa$

⑧から交換律と移出律により⑨の論理式が得られる。

⑨ $Pb \rightarrow (Pa \rightarrow Qa)$

④と⑨から肯定式により⑩の論理式が得られる。

⑩ $Pa \rightarrow Qa$

②と⑦から⑪の論理式が得られる。

⑪ $(Pa \wedge Pb) \rightarrow Qb$

⑪から移出律により⑫の論理式が得られる。

⑫ $Pa \rightarrow (Pb \rightarrow Qb)$

③と⑫から肯定式により⑬の論理式が得られる。

⑬ $Pb \rightarrow Qb$

⑩と⑬を合成することで⑭の論理式が得られる。

⑭ $(Pa \rightarrow Qa) \wedge (Pb \rightarrow Qb)$

(26) $Pa \rightarrow Qa$ が $Qa \rightarrow Pa$ を論理的に含意しないことは、 Pa が偽で Qa が真のとき、 $Pa \rightarrow Qa$ は真となるが $Qa \rightarrow Pa$ は偽となることから明らかである。すなわちこの真理値割り当てのもとでは、 $(Pa \rightarrow Qa) \rightarrow (Qa \rightarrow Pa)$ は全体として偽となるのである。

(27) シブリィの言う「否定的条件支配 (negative condition-governing)」関係を記号表現するならば、 $\neg Pa \rightarrow \neg Qa$ となり、その対偶を取るならば $\neg \neg Qa \rightarrow \neg \neg Pa$ 、すなわち $Qa \rightarrow Pa$ となるが、このことから明らかに、少なくともシブリィの言う「否定的条件支配」関係が知覚的特性と美的特性との間

に成立するとするならば、 $Pa \rightarrow Qa$ は成立しえない。逆に言うならば、 $Pa \rightarrow Qa$ が成立するとするならば、シブリーの言う「否定的条件支配」(Sibley [1959/2001]:3-13) が斥けられ、キヴィーの言う「肯定的条件支配(positive condition-governing)」(Kivy [1973], especially chap.1:1-21 and chap.3:36-60) が認められることになる(cf. Levinson [1983/1990])。

(28) ここに言う「現象学 (phenomenology)」とは、フッサールを始祖とする哲学史上のひとつの運動を限定的に指すものではなく、広く一人称の視点から経験される意識的経験一般に関する研究を指す。cf. Smith [2008]。

(29) 註(4)にも指摘したように、構造的な高階美的特性は、少なくとも体験者の意識事実のレベルでは、その都度一次的美的特性として定立し直されることになるため、基本的に本文に示した①と②の二点が成り立つことになる。逆に言うならば、ここで問題となる高階美的特性とは要するに、意味論の高階美的特性に他ならないのである。

(30) 美的特性にとって範例となるものを無自覚のうちに(意味論的)高階美的特性に求めるという事態は、藝術作品において問題となる美的特性、すなわち藝術的美的特性 (artistic aesthetic properties) の中心におかれるものが(意味論的)高階美的特性であることに起因するものと考えられる。すなわち、こうした態度の背景にあるのは、美的特性にとってその範例的事例となるのはあくまで藝術的美的特性であるとする理解に他ならないのである。

(31) ビアズリーからの影響の下に同様の理解を示す論者にシブリーがいる。cf. Sibley [1965/2001]:37, 49。

(32) 「美学上のゾンビ (aesthetic zombie)」とは、いわゆる「哲学的ゾンビ (philosophical zombie)」とパラレルな関係にある、美学上のある種の思考実験のために想定された想像上の存在である。ここでその暫定的定義を示しておくならば、それは「観測可能なすべての物理的状态に関してはわれわれ一般の人間とまったく変わらないものの、ただ一点美的クオリアを一切もたないという点でのみわれわれとは異なる存在」といったものとなる。cf. Kirk [2011]。

(33) Cf. Pettit [1983]。

(34) Cf. Beardsley [1974]:337, Bender [1987]:31r。

(35) この点について、註(13)でも取り上げたドライバーの例をもとに説明しておくならば、それは以下のようなものとなる。件のドライバーの目に突然飛び込んできた信号の赤は、それ自体がある種の美的特性を帯びて

いと言えるが、今現に車を運転しているという現実の状況の脈絡(実践的連関)においては、通常その美的特性の感受は顕在化されることなく潜在的なものにとどまることになる。あるいは仮にそうした美的感受が顕在化することがあったとしても、それは一瞬のうちに、「あ、信号が赤だ!」という驚きを交えた情感的認知とそれとほぼ同時に起こる急ブレーキを踏むという行動に回収・消尽されてしまうことになる。もしそうではなく信号の赤の美的享受に彼がしばし浸ったとするならば、運が悪ければその直後に彼は交通事故を引き起こすことになる。

(36) 認知的特性や行動態勢特性のうちに回収・消尽されてしまう美的特性を「弱義での美的特性 (aesthetic properties in weak sense)」もしくは「原美的特性 (proto-aesthetic properties)」と、また他の特性のうちに回収・消尽されることなくそれとして保持される美的特性を「強義での美的特性 (aesthetic properties in strong sense)」と名づけることにする。

(37) 以下に示す議論のひとつの出発点となっているのは、松崎 [2008]である。

(38) Cf. Fenner [1998]。

(39) 「中立性変容 (Neutralitätsmodifikation)」は、あらためて言うまでもなく、フッサールの現象学に由来する術語であるが、その要点は、対象を現実的な存在者 (das wirkliche Seiende) として存立させる一切の定立作用 (Setzung) を中止する点にある。したがって中立性変容をとおして、対象の存在／非存在はもはや問題とされず、対象はいわば「宙つりのままに (dahingestellt-sein-lassen)」たんに思い浮かべられるだけに過ぎないもの (bloß Gedachtes) と化することになる (Husserl [1913/1995]:247-9)。

(40) 一次的美的特性が意味論的コンテクストとしての参照枠のもとであらたに意味を付与されて二階の美的特性(あらためて言うまでもなく、これは意味論の高階美的特性の一種をなす)に変ずるとき、中立性変容を被ることでその実在性格を「宙吊り」にされてしまった認知的特性と行動態勢特性は、あらためて虚構的(仮象的)認知的特性と虚構的(仮象的)行動態勢特性として定立されうることになる。こうして二階の美的特性(一般化して言うならば、意味論の高階美的特性)は、虚構的(仮象的)認知的特性および虚構的(仮象的)行動態勢特性との融合相で現出しうることになり、そのとき一種の虚構(仮象)世界が開示されうることになる。

参考文献

- Beardsley, Monroe C. [1973/1982]. "What Is an Aesthetic Quality?" In: *Theoria*: 50-70. Reissued in: Chap. 6 of his *The Aesthetic Point of View: Selected Essays*. Edited by Michael J. Wreen and Donald M. Callen. Ithaca/London: Cornell University Press, pp.93-110.
- [1974]. "The Descriptivist Account of Aesthetic Attributions." *Revue Internationale de Philosophie* 28: 336-52.
- [1981]. *Aesthetics: Problems in the Philosophy of Criticism*. 2nd edn. Indianapolis: Hackett Publishing Company.
- Bender, John W. [1987]. "Supervenience and the Justification of Aesthetic Judgments." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 46: 31-40.
- Eaton, Marcia Muelder [1994]. "The Intrinsic, Non-Supervenient Nature of Aesthetic Properties." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 52: 383-97.
- Fenner, David [1998]. "Aesthetic Attitude." In: *Encyclopedia of Aesthetics*. 4vols. Edited by Michael Kelly et al. New York/Oxford: Oxford University Press. Vol.1, pp.150-3.
- Goldman, Alan H. [1993]. "Realism About Aesthetic Properties." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 51: 31-37.
- [1995]. *Aesthetic Value*. Boulder / Colo.: Westview Press.
- [2009]. "Aesthetic Properties." In: *A Companion to Aesthetics*, 2nd edn. Edited by Stephen Davies et al., Oxford: Wiley-Blackwell, pp.124-8.
- Goodman [1976]. *Language of Art: An Approach to a Theory of Symbols*. 2nd edn. Indianapolis: Hackett Publishing Company.
- Hermerén, Gören [1988]. *The Nature of Aesthetic Qualities*. Lund: LundUniversity Press.
- [1993]. "The Variety of Aesthetic Qualities." In: *Aesthetic Quality and Aesthetic Experience*. Edited by Michael H. Mitias, Amsterdam: Rodopi B. V. 1988. Reissued in: *Contemporary Philosophy of Art: Readings in Analytic Aesthetics*. Edited by John W. Bender and H. Gene Blocker, New Jersey: Prentice-Hall, pp.260-7.
- Husserl, Edmund [1913/1995]. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philo-*
- sophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. In: *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung* 1,1, S. [1]-323. Reissued in: *Husserliana*, Band III/1. Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Kirk, Robert [2011]. "Zombies". In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/zombies/>.
- Kivy, Peter [1973]. *Speaking of Art*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Levinson, Jerrold [1980/1990]. "Aesthetic Uniqueness." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 47: 435-49. Reissued in: Chapter 6 of his *Music, Art, and Metaphysics: Essays in Philosophical Aesthetics*. Ithaca / London: Cornell University Press, pp. 134-58.
- [1983/1990]. "Aesthetic Supervenience." *South-ern Journal of Philosophy* 22 Supplement: 93-110. Reissued in: Chapter 7 of his *Music, Art, and Metaphysics: Essays in Philosophical Aesthetics*. Ithaca / London: Cornell University Press, pp.134-58.
- Lewis, David [1978/1983]. "Attitude *De Dicto* and *De Se*." *Philosophical Review* 65: 203-211. Reissued with "Postscript" in: Chapter 10 of his *Philosophical Papers* Vol.1: 133-56.
- Pettit, Philip [1983]. "Aesthetic Realism". In: *Pleasure, Preference and Value*. Edited by Eva Shaper Cambridge: Cambridge University Press, pp.17-38.
- Sibley, Frank [1959/2001]. "Aesthetic Concepts." *The Philosophical Review* 68. Reissued in: *Approach to Aesthetics: Collected Papers on Philosophical Aesthetics*. Edited by John Benson, Betty Redfern and Jeremy Roxbee Cox. Oxford / New York: Oxford University Press, pp.1-32.
- [1965/2001]. "Aesthetic and Non-aesthetic." *The Philosophical Review* 74. Reissued in: *Approach to Aesthetics: Collected Papers on Philosophical Aesthetics*. Edited by John Benson, Betty Redfern and Jeremy Roxbee Cox. Oxford / New York: Oxford University Press, pp.33-51.
- Smith, David Woodruff [2008]. "Phenomenology." In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/phenomenology/>.
- Swoyer, Chris [2011]. "Properties". In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/zombies/>.

edu/entries/properties/.

荳阪直行 [2010]. 「感性言語－擬音語・擬態語と脳」、
三浦佳世編『知覚と感性』北大路書房、156-84 頁。

日本色彩学会編 [2011]. 『新編 色彩科学ハンドブック
第 3 版』東京大学出版会。

廣松渉 [1989]. 『表情』弘文堂。

——[2010]. 『役割理論の再構築のために』（初出
1986-8 年）、岩波書店。

松崎俊之 [2008]. 「青を見る－美的知覚の問題」、『芸術
文化』第 13 号、33-46 頁。

——[2010]. 「美的特性に関する階層構造理論」、『芸

術文化』第 15 号、11-32 頁。

山口尚 [2012]. 『クオリア哲学と知識論証－メアリーが
知ったこと』春秋社。

山梨正明 [1988]. 『比喩と理解』東京大学出版会。

本稿の一部は、東北芸術文化学会第 18 回大会（2012
年 7 月 7 日、於仙台市情報・産業プラザ「アエル」）
において「知覚的特性と美的特性との関係に関する一
考察－廣松渉の表情理論を手がかりに」という論題の
もとに口頭発表した。